

## 順子との旅行

兒玉 稔

平成二十七年二月二十三日

娘、順子と二人してグアム島に遊びしことあり。彼女高校一年の時なり。

冒険心旺盛なる娘、當地にて盛なるパラセーリング試みたしと云ふ。これパラシュートに椅子を結はへ、高速モーターボートに曳かしめ空中高く浮かせ、やがて船の速度落して船に戻すものなり。沖合の遊び且つ高度大なれば危険と思へども、娘の希望全ては禁じ難し。心配しつつ許可してホテル内事務所に申込み。

我は高みに上るを苦手にし、スカイツリーに登る催し、鷹の理由作りて逃るるほどなり。この時も娘のみ行かせ、自分はホテルにて待つつもりなりき。されど、ボート乗場遠くして迎へのバスに乗る要あれば、思春期の娘一人行くは心配。我も供してバスに同乗せざるべからざりけり。

バス、定刻に現はれやがて乗船場に到着。十四五人の客、同時に船に乗るものらし。小屋にて待つほどに順番来りて整理員手招きし、娘立上がりてボートに向ふ。

整理員、突如我にも乗船を促す。そは何らかの手違ひなり。我は附添にして料金不拂なれば乗船に及ばずと辭せども、彼、我の拙き英語を如何に聞きたるか、はたまた時間を惜しむか、強引に我が脊を押して乗船せしむ。

さてモーターボート。エンジン音けたたましき上、その揺れ、正に未舗装の荒山を行くトラックの荷臺にあるが如し。船上、鉤にて固定せる二連の椅子見ゆ。やがて沖合に至りパラセーリング開始す。係の男、椅子に乗客二人を坐せしめ、疊まれたる巨大袋状の物の紐を放てば、パラシュート徐々に形を表し、あれよと見る間に大きに開く。男、時を計りて鉤を外せば椅子の二人空に浮き始め、ボート、速度を増し、繫留紐、唸を上げて伸ぶ。唸り止む時、紐の先の二人は早や空中彼方にあり。

しばし後、ボート減速し、男、紐をたぐりて椅子を降ろし、所定の位置に収めて素早く鉤をかけ、次の客と交替せしむ。降り来る客は満足顔、新たに椅子に著く客は不安顔なり。さしたる救助装置も備へざるこの船、何らかの事故あらば如何せむ。危険なる遊びにてあるものよ、と思ひ思ひするうちに、娘の番來たる。

先刻より、他の客はいづれも二人連れなれば、連れ有せざる娘を如何に扱ふの疑問あり。と、彼、事こそあれ、我に同乗せよと手振で示す。我は、否、料金不拂ひなり、附添ひなり、これ若者の遊びにして我年齢は・・・云々と必死に訴ふるもボートの機械音に紛れてその效無く、氣附けば我、かの椅子に坐し、腰ベルトを我が爲に装著する男の目焼顔、眼前にあり。

ボート、速度上ぐ。パラシュート開き始め、固定鉤外され、我身宙に浮く。怖ろし。されど斯なりし上は覺悟を決め、端然を粧ひ、坐して動かず。その實は、怖さゆゑに身を堅くし、また、餘分なる舉動を慎みてパラシュートが負擔を些かなりとも減じ、以て

安全度高めむとするなり。

船上にて仰ぎ見るよりも更なる高みに登りし心地す。眞下は、正しく何も無き空間にて、遙か下に海面あるのみ。斜め下前方に向けて延ぶる紐の先に、我等を曳くボートとそが残す白き波小さく見ゆ。

遠きにある陸地を見る時は、然までの高度を感じざれば、気分やや樂なり。されど隣にて常と變らぬ聲の調子にて「良き景色なり」「彼方にあるはヨットなるや」など云ふ娘に相槌打つ餘裕これなく、疾く降りたしとのみ思ふ。漸く時至り、パラシュート下り始め、滑らかにボートに歸り著き、事故無かりしに安堵す。

氣附けば料金不拂ひのまま終りぬ。假に請求あると雖も、厭はしき體驗無理にせしめたる彼等に拂ふ謂はれある筈もなし。

歸りのバス内、娘に「二三百メートル上りたるや」と問へば、彼女素氣無く「三三メートル」とこそ答へぬれ。